

パウロは都合三回にわたって伝道旅行をしました。それはおおよそ8年にわたる間に3回にわたって行われた、大変な大旅行でした。旅した距離も長ければ、行く先々でいろいろな困難に遭遇していったという意味でも大変な旅でした。しかし何といてもイエス・キリストの福音を宣べ伝える旅ですから、困難の中にも喜びにあふれた、また多くの出会いを与えられた旅であったことと思います。使徒言行録はその旅を13章から21章まで9章にわたって書き記しています。

ところが、3回にわたる伝道旅行を終えてエルサレムに行ってからパウロは惨憺たる現実に打ちのめされるような日々を送ることになるのです。パウロを敵対視するユダヤ人の手によって捕らえられ、リンチに遭い、駆けつけたローマの守備隊の千人隊長によって捕縛(ほぼく)され、以後囚われの身となり、裁判の被告となり、しかもその裁判は引き延ばされていくというぐあいに。あれほど活動的に、あれほど各地を駆け回って福音を宣べ伝えたパウロが、ここでは幽閉を余儀なくされている。閉じ込められているのです。

パウロはユダヤの総督フェリクスのもとで、裁判を受けましたがフェリクスは結局裁判を延期し、2年もの間パウロを監禁状態に置き、いわば宙ぶらりんにしておきました。ユダヤ人の顔色もうかがい、自分で決着をつけたくなかったのかもしれませんが。パウロはこの2年間いったいどんな思いだったのでしょうか。パウロにはローマで伝道したいという願いがあり、「元気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証したように、ローマでも証ししなければならない。」という主の言葉も彼は聞いていたのです。

にもかかわらず、拘束状態を余儀なくされて、2年も身動きが取れなくなってしまった。苦しいことやつらいことがあったにせよ、歯車はしっかりと噛み合って、前進していたと思える伝道旅行の状態から、前に進めない状態に陥ったのです。それもユダヤの宗教的な権力者や、ローマの総督という権力者によって翻弄されるように、振り回されているのです。パウロはこのときいったい、何を思い、どういう心持ちでいたのでしょうか。

これはわたしたちも自分の人生において経験することではないでしょうか。自分の人生が前に向かって進まない、壁にぶつかっていく。自分を越えた大きな力に振り回されていく。そこで、神さまに不平不満をぶつける、ということもあるかもしれない。神

を恨む人もいるかもしれない。

この事態が動き出すのは、2年たって総督がフェリクスから、フェストゥスに変わることであった。新しい総督は着任するとすぐにエルサレムに行き、ユダヤの主だった人々と会見する中で、祭司長たちがパウロをエルサレムに送り返すよう訴えたのです。護送途中でパウロ殺害しようとする陰謀もあったようですが、フェストゥスは、告発するなら、カイサリアに来てしろ、と言い、ユダヤ人の要求をはねのけました。やがてフェストゥスがカイサリアに戻ると、ユダヤの最高法院のメンバーはやって来て、パウロを告発しました。しかしどれもその罪状を立証することはできず、フェストゥスはパウロに、「おまえはエルサレムで裁判を受けたいと望むか」と尋ねます。フェストゥスは最初にエルサレムの裁判を退けたにもかかわらず、ここではもう一度、エルサレムで裁判するか、と尋ねる。こうした態度の取り方にはいろいろな見方があります。今あまり深入りしないで、簡単に言えば、一方でユダヤ人に厳しい顔して一方でユダヤ人にもおもねる、という総督としてのスタンスだったのかもしれない。パウロは「わたしは皇帝の法廷に出頭しているので、ここで裁判を受ける。」といったうえで、「わたしは皇帝に上訴します。」と言う。するとフェストゥスは陪審の人々と協議し、皇帝のもとに出頭するようパウロに命じるのです。つまりパウロは、ユダヤ人の法廷ではなく、フェストゥスの判決でもなく、ローマ皇帝の法廷で、自分の判決を受けることを強く望んだ、ということです。2年間もほったらかして、監禁されていたパウロは一転、ローマに行くことになるのです。しかもそれはローマで裁判を受けるため、という特別な仕方でした。

数日たってからユダヤの王アグリッパが新任の総督フェストゥスを表敬訪問しました。総督は王にパウロのことを話し、王が会ってみたいというので、パウロは今度はアグリッパの前で弁明することになる、それが25章の後半です。

パウロはエルサレムに来て、身柄を拘束された。自由に伝道もできなくなった。法廷でどのような判決が下されるのか、わからないままに監禁された。こういう状態であれば、人は誰でも不安とか、おそれとか、神への恨み、不平、そういうもので心の中がかき乱されたとしても、何の不思議ではない、と推測する人もいます。

ある人は、パウロはこのときひたすら祈り続けていたのではないかと推測しています。祈るしかすべはなかった、道が開かれることを待つ以外のすべはなかった、ということです。そしてローマに行くことが総督によって決まった時に、パウロの祈りは聞かれ始めたということです。

その推測は、もちろんよくわかる推測ですが、果たしてそうだったのか、大いに疑問

です。不安とかおそれとか、神への恨みとか、不平とか、あったのかどうか、もちろんわかりません。しかし、かりにパウロの中にそういうものがあつたとして、パウロは、自分の感じ方や自分の思いではなく、主が定めてくださった道があると受け止めていた。パウロはエルサレムに来る直前、エフェソの長老たちに向かって、こういうことを言っています。「今、わたしは霊に促されて、エルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何もわかりません。ただ、投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということだけは、聖霊がどの町でもはっきりと告げてくださいます。しかし、自分の決められた道を走りとおし、また主イエスからいただいた神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。」

どんな場合でも、わたしたちにはわたしの感じ方、現実を見る見方があるでしょう。だが大事なのは、その自分の感じ方や見方に拘泥するのではなく、キリストが示してくださる道に従うことだ、とパウロは言っているのです。その場合道とは、神の恵みの福音を力強く証しすることだ、とパウロは言っているのですが、伝道旅行で活発に多くの人に向かって力強く証しするのも道ならば、獄中であつてなお、自分はキリストの恵みに生かされて今日もある、ということをつたえただけ感謝するのも力強い証の道なのです。

パウロは捕えられ、監禁されたら、それで主の道を歩めない、とは思っていなかった。捕らえられても監禁されても、自分がキリストの信実によって恵みの中に移されていることは変わることがない、ということ知っていた。その恵みの中に自分は置かれ活かされている、と信じ感謝した。それが福音の証なのです。

獄中ではすべての道が閉ざされているから祈るしかすべがない、そしてローマ行きが決まった時、パウロの祈りは聞かれ始めた、というものの見方は、表面的に過ぎるものの見方だと思います。というか、一つ間違えれば、とてもエゴイスティックな、自分の願いがかなうかどうかだけで事柄を見ていることになりかねません。もちろん獄中でパウロは祈ったでしょう。しかしそれは、祈るしかすべがなかったということではない。獄中もまた、キリストの恵みの中に置かれている場です。義とされているのです。移されているのです。

わたしたちは元気で、思う存分キリストにお仕えし、福音を証しできる時もある。しかし、病気で、いろいろ困難を抱えて、自分が思うようには、キリストにお仕えすることも、福音を証しできない時もある、と考えがち、思いがちです。だがそれは違うのではないか。パウロは伝道旅行に従事したときも、そして囚われの身に成つた今も、わたしはキリストの恵みの中で生かされ、キリストにお仕えしている、そのことを知らされて

いた。そのことを受けとめ始めたとき、おそらくわたしたちの生き方は根本から変わっていくのだと思います。

使徒言行録の著者ルカもそのことを受けとめている人だったのだと思います。ルカはパウロが伝道旅行に邁進しているその姿も描いた。しかし同時に、囚われ、幽閉され、身柄を拘束されたパウロも、描いて、その中で、活かされるパウロを伝えた。ルカはパウロがいかに信仰の達人だったか、というようなことを描こうとしたのではないし、そういう興味はまったくなかった。歯車がかみ合うように現実が進むときも、そうでない時も、パウロは活かされている恵みの中にあつた、ということを書き記しているのです。パウロは結果的に、ユダヤ最高法院の人々の前で、千人隊長の前でも、そして総督の前でも、ユダヤ人の王の前でも福音の証しをしました。また信仰の話をしました。それはパウロが演説にたけていたから、というような事柄ではありません。自分を活かしているものを日々自覚していた人の言葉です。自分がどこに置かれているのか、そのことを心底受けとめている人が出会った現実の中で、その都度語った言葉なのです。パウロを活かしている恵み、その同じ恵みの中にわたしもあることを受けとめ、どんな時もこの恵みに生かされ、キリストにお仕えしていきたいと思うのです。